

## 痛恨

九州の酷しい残暑とは一昨日別れを告げた。今や吹く風も心地よい船上である。眼下に広がる瀬戸の海は、彫銀のような小波が陽光を反射して眩い。手を翳して遠くに目をやれば、様々な形の緑の小島が点々として、まさに一幅の絵に囲まれているようだ。

七十歳を迎えた今川了俊は、舷側にもたれてゆっくりと動く風景を眺めつつ、その心のように揺れる船に身を任せていた。

長い年月戦場にあって、日焼けした顔に皺も深く刻まれ白髪も兜の摩擦で横鬢に残り僅かである。瘦身ながら背筋は延びて、鬘鑠という表現ほどの老いではなく、柔軟な思考力の持ち主に見えるが、その表情は微かに暗い。

九州探題今川了俊が、思いもかけぬ召還の命令を受け取ったのは、一月前の応永二年（1395）閏七月のことであった。慌ただしく一族、家人とともに肥前小城に集まり、準備もそこそこに今、船での帰京である。この急な召還の意味するものが何であるかは、今の了俊には推測する他はない。

自分の長年の九州経営の努力に対して、將軍の報酬が待ち受けているのだろうか。はたまた讒言や中傷などによる失脚なのだろうか。了俊は、どうも後者の匂いが強いと思うのだった。そう思う根拠がない訳でもなかった。

「うむ。あの時までは確かに順調に運んでおったのじゃが」 華々しかった往路の旅と引き較べて、余りにもそっけない帰路である。痛恨の思いを込めて了俊はこの苦渋に満ちた四半世紀をつくづくと振り返るのだった。

発端は二十五年前の応安三年（1371）に逆上る。六月初旬のある日、了俊は当時まだ幼い將軍義満の執事として一切の実権を握っている細川頼之に呼び出された。

梅雨明けの蒸し暑い午後、了俊は馬を走らせて將軍の御所に着いた。頼之の執務の部屋に招じられると、頼之は書き物の手を休め、座を移して了俊をねぎらった。了俊より三歳年下の頼之も了俊と同様に戦乱の世を転戦に明け暮れてここまで生き延びて来た武将である。面長の整った顔だちに思慮深い眼差し、小柄ながら骨太の体格には、誰もが信頼感を覚える重厚さがある。対する頼之より三寸ほど背丈の高い細身の了俊には、やや感傷的な繊細さと優柔さが感じられる。

挨拶を終えると身を乗り出した頼之は、了俊の目を真っ直ぐ見つめて言った。

「我等お互い生まれてこの方、戦乱に明け暮れて参ったようやくこの辺りの戦火は収まったとはいえ、ご存じのように越中の桃井、九州、河内の南党の輩は何時勢力を逆転させて幼い上様に襲いかかって来るやも知れぬ。なかんずく九州は問題なことは言うまでもござらぬ。初代將軍尊氏様が京を奪回なされたのも九州のお味方の力であった。この重要な九州攻略におぬしの協力を是非お願いしたい。任務は九州探題ということで、九州の軍、訴訟、政治の一切をお任せする。これは私の推挙であるが、上様のご意向でもあるのだ」

半世紀ほども続いていた南北朝の争いも、足利幕府が曲がりなりにも中心となって、中央はほぼ北朝が制してた。しかし未だ九州では懐良親王の率いる南朝方の勢力が強く幕府も苦慮して来た。それより以前に任命された斯波氏経・渋川義行がぶざまにも失敗した後であった。了俊今川貞世は四十五歳。彼は当時、円熟の域に達した歌人として、また連歌の達人として広く知られていた文化人でもあった。頼之は熟慮の末にその彼を武人として九州に於ける最高の権限を持つ要職に推挙したのだ。

二年前、將軍足利義詮が病に倒れた折、義詮は四国から細川頼之を呼び寄せ、まだ十歳の義満の補佐役に当てていた。頼之は義詮没後、元服して將軍職を継いだ義満の執事となり十二年間、まだ不安定な幕政の確立に力を注ぐことになる。そして今、当面の大きな課題である九州攻略を、長年將軍家一筋に働いてきた了俊に任せようというのだ。

「これは今川氏一族の大きな仕事になる筈。ゆっくり時間をかけてご準備なされ。出来る協力は惜しまぬ故何なりとお申し出なされよ」

思いがけぬ大任の拜命である。暫く黙っていた了俊はやがて重い口を開いた。

「これは重要なお役にご推挙かたじけなく存ずる。上様のご意向とのこと、

誠に名誉なこと、先ずはお礼を申し上げねばなりません。このお役は我等一門の名を挙げるまたとない機会でもござれば、全力で励む所存にござる。ただ後顧なきように幾多の始末もあろうかと存ずる。ここはお言葉に甘え十分ご猶予を頂きたい。ご期待を裏切らぬようによく考え計略を立てます」

ゆっくり一礼して了俊は座を立った。頼之も立って目礼して見送った。うつむき加減に縁を行く了俊は、ふと足を止め梅雨明け後間もない鮮やかな緑の庭に目をやると、ほっとため息をついた。心配性とも言える程配りを怠らないない彼の頭の中を、晴れがましさと困惑が激しく渦を巻いていた。

これまで了俊は混乱したこの時代を、父範国と共に武人として各地で転戦を続けて来た。そして四十二歳の時父の後を継いで幕府の要人である引付頭人となった。引付は所領の訴訟を取り扱う役所で、数班に分かれ、各班の首班を頭人と呼んだ。続いて治安を司る侍所頭人と山城守護も兼任して多くの記録に残る仕事している。このように彼は武人としても行政官としても幕府の信頼を得る役を十分に果たしていた。

しかし頼之が了俊を信頼したことにはまだ理由があった細川氏も今川氏も足利氏と同属支流である。細川氏は三河に、今川氏は駿河、遠江に所領があった。当時は財産である所領の紛争が絶えなかった。南朝北朝いずれに与するかもその恩賞の所領の多寡にあった。了俊の父範国は了俊に駿河守護を譲ろうとしたが、了俊は固辞して兄範氏に譲った。この無欲さに頼之は感じるものがあったのだ。

了俊は家に戻ると、暫くあれこれと考えた。長年幕府の要職を勤める傍ら、和歌や連歌、禅などに親しんで来た。それらによって培われたきずなを切らねばならない。

了俊は幼い頃から祖母の香雲院に和歌の手ほどきを受けていた。少年時代からは京極為基を師とし、その為基も編集の役に与した「風雅和歌集」に一首が採択されている。

散る花をせめて袂に吹きとめよそをだに風の情と思はむ

二年前に三十八歳で没した前將軍義詮は、短歌冷泉派の保護者でもあった。冷泉派に属していた了俊は弔意を表して出家し、貞世から了俊と称するようになったほどの思い入れがあり、また二条良基について連歌も学んでいた。また徒然草の筆者の兼好法師とも交わりがあった。

こうした文学の仲間との別れも辛い、何よりも自分の根拠地である遠江のことが気掛かりである。遠江は京よりずっと東である。それが西の果ての九州に赴くとなれば、その経営はどうなるのだろう。了俊には気になることをくどくどと考える女性的な一面があった。

了俊は頼之に宛ててそれとなく心境を伝えた。

何となく心にかけて思うかな浜名の橋の秋の夕暮れ

頼之は了俊の不安な気持ちを理解して

「御分国（遠江）ゆめゆめ相違有るべからず」と保証したのだった。

了俊は文人たちにも別れの手紙を書いた。京に残すことになった妻萩尾との別れも辛いもので、落ちついたら呼び寄せるつもりだが、先ずは敵を平定せねばならない。ある夜、夕餉の後改まっては了俊は妻に言った。

「いずれは身近に居てほしいとは思いますが、当分は戦乱の日々となるろう。太宰府が探題たるべきであろうが、今は敵の根拠地となっている有り様じゃ。ひとり留守を勤めるのも淋しかろうが、十分余裕あるように遠江の瀬之口よりそなたへの年貢が届く筈故、しばらく辛抱なされよ」

普段でも外出が多く、戻っても書き物や読書に閉じこもっている了俊に慣れている妻の萩尾はあっさりと応えた

「私のことは全くお気遣いには及びませぬ。私にも歌やお念仏の友達が大量に居ります。都さえ物騒でなければ、日頃遅くまでお帰りを待っているよりは、ずっと心易くのんびりと暮らせます。私のことよりお役目に専念なされて、戦果を上げて一日も早くお帰りなされませ」

この返答に了俊は、自分は二十三年間連れ添った一人の女さえ理解していなかったことを思い知らされた。普段お互い口数が少ない仲であったから、身の回りの世話を細々としては下がっていた妻は、もっと自分を頼りにして別れを嘆き悲しむだろうと思っていたのだ。

萩尾はそうした演技は一切しなかった。彼女は夫の了俊よりも共に出陣するわが子の義範の身を案じていた。そして未だ孫の顔を見ていないことも嘆いた。了俊の萩尾への歌

今更に知らぬ命を嘆くかな変らぬ世々といひしちぎりに  
に健気にも次のように答えたのだが。

白菊の露は地の面に消ゆるとも名残の香こそ止めおかまし

了俊は関係ある友人、知人に、せっせとこの度の赴任について書き送り、協力を要請した。そして翌年の二月になってゆるゆると九州下向の途についたのだった。

この遠征は了俊にとって一族郎党こぞっての出陣である了俊は、それまでに上洛していた九州の将士も従え、用心深く途中の国人や地頭にも幕府方に協力を取り付けながら進んだ。また立ち寄った土地の神社に詣では寄進をすることで、信用を得た。それが自信となり、行軍も堂々と進んだ。

第一の目標は太宰府の攻略である。太宰府は十年ほど前に南朝の征西宮懐良親王を擁した菊池武光が少弐氏より奪取して以来、九州に於ける南朝の全盛期を画していた。ここを奪回するのは周到な作戦が必要である。了俊が戦力を集中して九州を目指している報が入れば、太宰府も緊張し身構えていることだろう。

菊池氏は藤原隆家の末裔と言われる肥後の豪族である。源平の争いには平氏に付き、承久の変では京都方に付いたことから分かるように徹底して

反幕府であった。武光の父武時が後醍醐天皇の味方をして戦死して以来、南北に揺れ動く諸族とは異なり、南北朝の合一まで一貫して南朝に味方して戦い続けた。武敏、武士の死後、家督を末弟の武光が継いでいた。了俊は先ず息子の義範を豊後（大分県）に派遣し、大友氏と共に菊地氏を東方の背後から攻めさせ、弟の仲秋を肥前（佐賀県・長崎県）に発して、松浦党と結んで西方から、自身は豊前（福岡県東部）に上陸し北方からと、三方から太宰府を攻略する計画を立てた。

七月、先発隊の義範は豊後国東に上陸。菊地の配下の要害を攻め落とし、高崎城に入った。この報はいち早く太宰府のにもたされた。

武光は五十二歳。武将として最も円熟し実力のある年頃である。三十余年、合戦に明け暮れて来たわりには色白で八の字の黒々とした髭を生やしている。一重瞼の下の眼光は鋭く、きりりと結んだ唇は薄い。見るからに意志の強さが感じられる風貌である。縹色の大紋の直垂が一際引き締まって見える。彼は嫡子武政と若手の武将三名を呼んだ。

武政三十一歳は、明るくきびきびとした男だ。武光は手にした扇子を神経質にパチパチと開閉しながら言った。

「今入った知らせによると、国東の平賀新左衛門尉が了俊の先発の義範に敗れ、高崎城が奪われたそうじゃ。平賀彦次郎らは討死とのこと。了俊の到着は未だ先のことのようじゃが、ここは義範を潰しておかねば後々我等も危なくなる。武政、お前が先頭に立って高崎城を奪回し豊後を護れ。各々方も武政に続け」

太宰府は俄に慌ただしく騒然となった。そして二時間後には二百人ほどの一隊が豊後を目指して進軍を開始していた。急ぎの行軍ながら、彼らは道々兵を募り、豊後に着いた時は五百名ほどになっていた。

一方義範も近隣に幕府への協力を求め、中国地方からの援軍もあって、高崎城も氣勢が上がっている。義範も父の上陸には自分がこの地を制していることが必要条件と信じ必死に踏ん張って戦う。両軍の激戦は五ヵ月も続いたが決着を見なかった。

了俊の弟の仲秋は長門に寄り大内氏と連携をとり、十一月十八日翌日松浦に着いた。幕府軍の下向が遅れていたのも、肥前はなかなか纏まらず分裂の危機さえあったが、仲秋到着ということで、諸氏は続々と彼のもとに来会し、風向きはすっかり変わった。今や、北軍は押せ押せのムードである。そして肥前で展開した戦で次々と勝ち、筑前へと向かうのだった。

一方了俊は中国の諸族と連携を保ち、後顧の憂いのないようにする一方、九州の各氏に可能なかぎり書面を送って味方になるよう依頼していた。帰趨も定まらぬ者は勿論であるが、明らかに南朝方と思われる豪族にも何食わぬ調子で、協力を要請していた。仲秋の出帆に際して

勝事は千さとの外に顕れぬ浦ふく風のしるべまちえて

と快く詠んだ。彼は京都から長門の赤間関までの道中の見聞や歌を「道ゆきぶり」という紀行文として纏めた。飛脚などの便のない時代である。

妻萩尾への私的な文などは京までともなるとそう度々は書き送る訳にもい  
かない。文集として妻に読んでもらう楽しみも了俊にあった。

そうしてようやく関門海峡を渡り、門司に上陸したのはもう年の暮れも  
間近な十二月十九日であった。どんよりと重い冬の雲が空を覆い、鉛色の  
玄界灘を渡ってくる風は冷たく厳しかった。

明けて応安五年正月三日、菊地武光は、俄に北朝軍が活気を呈し太宰府  
を目指しているのに危機感を強め、武政に高崎城攻撃の陣を解き、軍を太  
宰府に戻すよう命じた。そして三月には自ら筑前松本城に進んだ。義範軍  
と筑前の軍との合流を防ぐためである。

一方了俊は門司から麻生山の城を抜いて、宗像から博多の先の高宮まで  
西進し、仲秋の軍と合流して、太宰府を目指して次第に南下した。一進一  
退の幾多の合戦も、時局の流れはいつしか了俊に味方して、南朝軍はじり  
じりと後退する。

了俊は、慎重に長い期間をかけて太宰府の包囲陣を形成していた。しか  
し八月、仲秋が菊地武安を破り、武安を追って筑前に入ると、彼はその機  
を逃さず一挙に攻撃に出た。そして十二日について九州経営の中心地太宰  
府を陥落させることに成功したのだった。

敗れた懐良親王・菊地武光は筑後川の南岸の高良山に立てこもった。高  
良山は標高三二メートルの小峰にすぎないが筑・肥・豊六カ国の交通の  
要所である。了俊は対岸の城山に陣を構えた。ここでの攻防は二年ほども  
続く。

その間了俊は筆まめにせつせと全九州の諸氏に書面を送り続けた。今ま  
での協力者には感謝状を、まだ帰参しない者には督促状を、南朝方の者には  
北朝へ寝返るよう恩賞をもって誘惑する。この頃になると、自身の地位  
保全のために無節操と思われるほど揺れ動いていた地方の諸氏も、次第に  
旗色が鮮明になって来た。

故朝河貫一博士（エール大学教授）の世界的論文「入来文書」に収録さ  
れている了俊の書状は、実に四十六通に及ぶ。この年六月、南朝方の入来  
院氏五代の重門は、北朝方の島津師久の峯城を攻め落としたが、自身は戦  
死した。それを賞する南朝の感状の届く一カ月前に、了俊は味方になれば  
本領は安堵するし、戦功あれば恩賞を約束するという書状を送っている。

参御方者本領不可有相違有功者可被抽賞之状如件

応安五年十一月廿五日

沙彌 花押清色虎五郎丸

殿

沙彌とは出家してまだ位の低い僧を意味し、了俊が謙遜しての語である。  
遅れて征西宮懐良親王の令旨

薩州峯城合戦之時親父討死之条所被感思食有抽賞之状依仰 執達如件

文中元年十二月廿一日

左少将

花押清色虎五郎丸

殿（包紙）

南朝の文中元年は北朝の応安五年である。左少将は藤原胤房で、令旨の執達者である。

この渋谷氏の世代交代の好機を逃すまいと、了俊は翌年の二月、三月と立て続けに、前回同様の書状を送っているこの例でも分かるように、了俊は高良山攻略に備えて、渋谷氏同様島津一族や彌寝氏、肝属氏、土持氏らに恩賞を約束する誘致の書状を送り、背後を固める努力をしていた。

この年の十一月、南朝の大黒柱の菊池武光が死没した。翌応安七年の五月には、長男武政も死去し、まだ十二歳の賀々丸が全軍の責任者として指揮を取ることになった。この不幸続きは南朝軍の大打撃であり、士気にも影響が出ない訳はなかった。この後南朝軍は徐々に衰退を余儀なくされて行く。八月、了俊は戦力を筑後川の対岸に集結させ高良山の攻撃の準備にかかった。十月はじめ、これ以上高良山を保つことは困難と覚った賀々丸や菊池武安は、懐良親王を奉じて肥後の菊池氏の本拠に撤退したのだった。

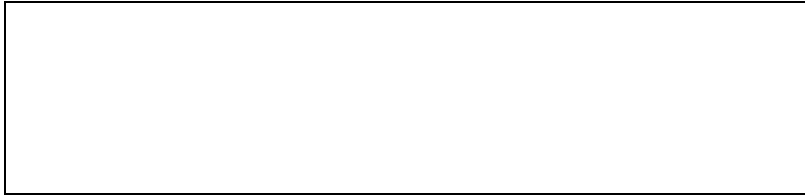
菊池氏は、阿蘇の外輪山の西北から流れ出る菊池川のもたらず肥沃な熊本平野の北部と阿蘇山系の複雑で広大な山ひだを根拠地としていた。本城隈府城（わいふじょう）の周辺に菊池十八外城とよばれる砦を持っていた。

またその奥の阿蘇には鎮西第一の旧家といわれる阿蘇神宮大宮司阿蘇氏が堂々と割拠して、ともに南朝方であった

応安八年三月、了俊は肥後の攻略にとりかかり、軍を熊本平野の北部の山鹿に進めた。旧くからの有名な温泉町の湯をいっときは楽しんだことであろう。ここから菊池川に沿って逆上り、七月十二日遂に軍を水島に進めた。

水島城は現在七城町の北の端にあり、後年、台（うてな）城と呼ばれたこともあって、現在は殆ど知る人もいないが、菊池川が山系から平野に移る喉元とも言える場所にあり、隈府の菊池軍と対峙するには絶好の場所と言えた。

地図



眼前の南東の山麓が宿敵菊池氏の根城である。振り返り見れば、北肥後の沃野が広がり、目の届くかぎり青々とした水田である。

「頑強な敵をとうとうここまで追い詰めた。あと一息だ」

了俊は先が見えて来たように思った。しかし阿蘇の先の豊後、日向、南肥後から薩摩、大隅には、はっきり敵対する者はいないものの、自分に積極的に恭順の意を示して来ている訳でもない。ここは実力ある中国の大友氏、豊後の少弐氏、薩摩の島津氏の三氏を味方に着けて、菊池氏をすっぱりと包囲せねばならないと了俊は思っていた。

了俊は以前から島津氏の誘致を心掛けて、一族の所領の安堵に力を貸すなどして恩義を与えていた。島津氏は五代貞久が二子師久、氏久にそれぞれ薩摩国守護職、大隅国守護職を継がせた。師久の官位上総介、氏久の官位陸奥守から、以後ぞれの家系は総州家、奥州家と呼ばれるようになる。しかし師久は十年ほど前に子の伊久に職を譲っていた

了俊は伊久とも文通を交わして誘致してはいたが、主に武将としての働きも目覚ましい氏久に期待して書状を送っている。彼はこの前、山鹿に出発する際にも、氏久に山鹿で参会することを促す書状を送っていた。

水島は緩い丘陵である。了俊は丘の頂上に本陣を置いて急ごしらえにしては材料を吟味してしっかりした城を作った。広間は三間四方の節のない板張りで、あとは了俊の部屋と控えの者の部屋が三部屋ほど作られた。夏のことで了俊の部屋以外は殆ど開放的である。

了俊は、大友親世、島津氏久、少弐冬資の三氏に参陣して菊池氏打倒に力を貸すようにと書状を送った。

七月のうちに、大友親世が先ず到着した。しかし島津氏久も少弐冬資もおいそれとは来ない。了俊は急ぎ書を他の二氏に送った。特に氏久には丁寧に来援を乞うた。八月上旬、遂に氏久は伊地知季弘・本田氏親等の家臣を率いて水島に参陣することを決めた。

旧暦の八月は初秋である。氏久は遠路を考えて選りすぐった六十余騎の少ない手勢と共に、八代の海沿いに北上し、宇都を過ぎて白川を逆上り途中から北に向きを変えた一行は、北肥後の沃野の色づき始めた稲田の中を午後の日差しを背に浴びて進んだ。遙か行く手の丘の上には何本もの旗指物がはためいているのが見える。近づくると相当の軍勢があちこちにたむろしていた。氏久は了俊の陣から三百メートルほど西の民家に陣を取った。

丘の上から見張りが島津氏の旗印を見つけて、早速了俊に報告した。了俊は喜んで、主立った家臣たちと城の入り口まで下りて迎えた。

「ようお出でなされた。この日を三年待ち続けましたぞ」

了俊は、満面に笑みを浮かべ、氏久の父貞久の長年の忠節を讃えて、氏久も父同様であろうとの意を言外に込めた

了俊は夜、氏久を陣中に招き地元の酒を勧め、ひたすら歓待に勤めた。

氏久時に四十八歳。了俊より二歳若く、氣力も分別も充実した年頃である。彼らの酒席の有様は、薩藩旧記雜録の「氏久公御譜中」に生き生きと描かれている

「ある時、了俊が氏久の館を訪ねて来た。彼は樽酒を土産に持って来た。ところがその大筒の栓が抜けない。了俊の連れてきた家来は誰も抜くことが出来なかった。そこで氏久は自分の家来に誰か抜く者はいないかと尋ねた。皆自信がなく申し出る者がなかった。そこに牧次郎三郎という者がただ一人進み出て、素袍の袖で筒口を覆い、大筒を腋にしっかりと抱え引っ張って、漸く抜くことが出来た。しかし酒はこぼれて座敷中に飛び散ったので、席の上下を問わず皆一斉に声を上げた。これも一興であった。老人たちがご褒美あるべきと言うので、家来が末席より召し出して、彼に盃を与え、また興を添えた」

酒宴で大騒ぎをしていても了俊の気掛かりは、ひとり残る少弐冬資である。

「越後守（氏久）殿。我等の気掛かりは、まだ少弐殿が参られぬことじゃ。この度はご一同の結束を以て、一挙に菊池氏めらを打ち破り、この長年の乱れを決し、世に安息をもたらす所存でござる。遠路のお疲れでもあろうが、是非少弐殿をお誘いください」

了俊は腰を低くして頼んだ。

氏久はこの所冬資とよく連絡を取り合っていた。翌日氏久は、冬資に來陣を勧める手紙をしたため、送った。ここに冬資もやっと重い腰を上げたのだった。

少弐氏は鎌倉幕府初期、太宰府の鎮西奉行に任ぜられて下向して以来、筑前・豊前・肥前・対馬・吉岐の守護となり、一時は筑後の守護も兼ねて、九州全域の地頭・御家人の訴訟準備の手続きを支配するなど強大な権力を握っていた。少弐氏はその権限を背景に各地に分割所領を得た上、太宰府の持っていた対外貿易の權益も得て、経済基盤も強くしていた。九州は少弐氏、筑後・豊後・肥後の守護である大友氏、日向・薩摩・大隅の守護の島津氏の三氏が九州三人衆とよばれ、その威力を誇っていた。

蒙古襲来の危機を利用した北条氏は、それまで三氏の持っていた権限を解消し、北条一門の者を鎮西探題として派遣した。その上、筑後・豊前・肥前・肥後・日向・大隅に一族を守護として派遣し、大幅に三氏の権限を後退させていた。三氏が、元弘の変の折に鎮西探題を攻め、鎌倉幕府の滅亡に力を貸した理由はここにあった。

南北朝の動乱期に入って、少弐頼尚は以前の栄光を夢見て失地回復に懸命であった。少弐の家は一般の守護とは違って太宰府の事実上の長官であったという自負がある。ということは、幕府の権威を背に太宰府に九州探題を置いている了俊とは、根本的には相いれないものがある筈であった。他の二氏にしても、幕府から派遣されたというだけの九州探題に頭を下げるのは、抵抗があっても仕方ないのかもしれない。それだけにまた了俊の苦悩も相当なものであった筈である。

頼尚の子冬資は、先に宗像の莊を侵犯して、了俊より厳しく抑止されていた。冬資は自分の勢力復旧のために、南朝、北朝のどちらとも帰趨を鮮明にしていなかった。了俊は内心少弐氏に強く不信の念を抱いていた。

冬資は、水島からの氏久の勧めをもだしがたく、百余騎の手勢を率いて参陣して来た。彼らは菊池川のやや上流に陣を敷いた。冬資は一番若く三十八歳の美男子であった。誇り高い少弐氏がはるばる出掛けて来るなどということは滅多にあることではない。了俊は、家臣や客人の大友親世島津氏久に声を掛けて、ともどもに冬資を出迎えた。

了俊と親世以外は、それまで文は交わしあっていたものの初対面であった。型通りの挨拶を終えると、先ずそれぞれの武勇を讃え合った。そして三人は了俊に

「いまや菊池の命脈もここまででありますよ」

と儀礼も加味して祝したのだった。ひとくさりの世間話の後、三人はそれぞれの陣に戻った。

翌日になると本陣では普請が始められた。障子や襖が入れられた。塗り塀に門戸が付けられた。少弐氏の御馳走の準備のためということであった。

八月二十六日夜、了俊は冬資を招き、氏久と同様に最上の料理でもてなした。盃が重ねられて、冬資は相当酩酊していた。頃を見計らって、兼ねて示し合わせていた了俊の家臣山内左衛門尉という屈強な若者が、酌を装って近寄り冬資を組み倒した。そこを了俊の弟の氏兼が刺し殺し、これまた手配してあった者たちによって、手早く遺体は運び出されたのだった。綿密に企てられた一瞬の出来事であった。

門は閉じられ、出入りは固く禁じられていたので、外部ではこの事変を知る者はいなかった。

必死の思いで抜け出した供の家来から、思いもかけぬ事変を聞いた冬資の家臣達の中には、緊急事態に対応出来る者が誰もいなかった。了俊との戦を叫ぶ者もなければ、殉死する者もなく、ただ混乱のうちに陣を解いて退散したのだった。今川の本陣の西の陣に眠っていた氏久は、慌ただしく飛び込んで来た伊地知季弘に目を覚まされた。

「殿、大事変でございます。冬資殿が昨夜宴席で誅殺されたとのことでございます。全て了俊めの謀でございます」

氏久は顔色を変えた。それは驚きから怒りに変わった。

「うむ。そんなことであったのか。よくも謀りおったな」

しばらくあって氏久は言った。

「我等今、今川軍の手の中である。ここで下手に動くと少弐氏の二の舞になるだろう。取り敢えず静かになりゆきを見守ることにしよう」

氏久の陣は内では緊張にはち切れんばかりであったが、外見は何事もなかったように静かであった。やがて了俊より手紙が届いた。

「自分は鎮西の探題職として下向して当国に入ったが、少弐殿が意見を異にしているため九州を平安にすることは難しかった。南朝軍の蜂起には冬資の謀があって動いているからである。この為に誅したのである。当方に

「参会されよ詳しいことはその折にお話する」

とあった。軍議が開かれた。家臣の一人が言った。

「前車が覆るのを見れば、後車はこれを戒めとすると言います。今もし彼の館に行くことは、少弐と同じに殺戮されることは免れずまい。ここはお止まりください」

氏久は言った。

「招かれて、行かないとなれば臆病の限りである。それに不参はこちらの落ち度になり、咎められよう。たとえ何かが起こったとしても何程のことがあるのか」

物具など付けて行くことは平静でないことを示すことになるとの氏久の言葉に、各々太刀を持っただけの平常な姿で参向することにした。

外の砦を通り、平然と氏久が陣門に向かう。後からいつも通り本田氏親が太刀を掲げて続く。他の家臣も競って氏久を守護して続いた。その豪胆さに見る者は舌を巻いた。

陣門に着いたが、今川の警固は嚴重であった。本田氏親が氏久に続いて入った。次に伊地知季弘が入ろうとした。警固の者が「大勢は狼藉だ」と止めた。氏親は言った。

「こういう事は臨機応変であるべきである。島津殿が発たれた後はご自由になされよ。それ迄はこちらの仕事でござる」氏親の気迫の勝ちであった。しかし他の家臣は一応門外に控えて待った。

本陣の出入口は唐筵が掛けられて中を窺うことは出来ないようにしてあった。しかし氏親は平気な顔をして中を覗いて見た。了俊とその兄弟や一族の者が伺候していた。

盃酒三献が過ぎた。了俊はこのような手段を取るに至ったことを縷々説明し正当化しようとしたが、話せば話す程虚しく聞こえるのだった。氏久は黙って聞いていた。そして

「おっしゃることは全て承りました」

とだけ言ってあとは無言で退出したのだった。

氏久は腹に据えかねていた。館に戻ると

「このままのめのめと帰れるか。少弐の一族と協議して、探題を討ち殺す相談をしようではないか」

家臣たちは驚いて諫めて言った。

「もともと少弐が菊池が通じていたのは事実でございます今は国にお戻りになって、国をお治めることが大切です」

氏久も思いなおして翻然と帰国の途についたのだった。

氏久は出立の直前に了俊に手紙を書き送った。

「この度参陣致しましたのは、度々のお招きもございましたので忠節を尽くすべしと考えたからであります。少弐殿がこのようにご沙汰となりましたことは、九州三人面目を失いました。その上、氏久は御意に従い彼方の参陣を促したという事実は隠れありません。今後この恥辱から逃れることは到底出来なんでしょう。領国に戻らせて頂きます」

以後氏久は決して了俊を許すことはしなかった。積極的に南朝方に味方した訳ではないが、北朝方からはいつも一定の距離を置いて来た。このことは九州の平定にどれだけの禍根を残したか計りしれない。

了俊は、同じく参陣していた大友親世と氏久との連合を恐れた。彼は豊後国内の幾つかの地頭職を親世に与え、懸命に慰撫したのだった。親世は、氏久のように少弐氏を自ら誘った訳ではなかったので、一応は了俊の慰撫に任せていた。しかし了俊に対する怒りと不信の念は深く残っていたのだ。

ここで一気に二十一年の飛躍をしよう。

九州探題の任を解かれた了俊は、今瀬戸の海を上方に向かって進んでいる。

その間を簡単に述べると、健気にも菊池賀々丸は武朝として、懐良親王の後を継いだ良成親王を扶け、南朝の旗を掲げ続け何度かの攻防を続ける。水島の変の八年後の春、懐良親王は矢部の山中で薨ぜられ、衰退は止めようもないが、細々ながら、時には大胆に了俊に歯向かい続けていている。

了俊に立腹して終生従うことを拒んみ、ついに南九州の統一を不可能にした氏久も八年前に亡くなっていた。

了俊は自分は決して冷酷ではないが、人間不信の疑い深い性格であることを自覚していた。誰もが自己の欲望のために右往左往する世であった。彼はこの人間の欲望を巧みに利用して、統一を図ろうとして来たが、やはり限界があった。

了俊はいかなる恩賞や榮譽に振り向きもせず、自分に秋波の一つも送って来なかった氏久が懐かしかった。氏久の頑固さ、菊池氏の一徹さこそ自分の憧れでもあったことにふと気づいたのだった。

今、振り返って最大の蹉跌は、水島に於ける少弐冬資の誅殺であったと思う。今回の左遷と思われる解任も、懐柔したとっていた大友親世の画策とも思われる節がある。

確かに少弐氏を滅ぼしたことによる平定の効果は大きかった。しかし自分に対する不信感を全九州に与えてしまったことは、何物にも変えがたい損失であった。その後の二十年間は何と重い年月だったろう。

如何に言い訳をして自分を納得させようと思っても、何か棘が胸につかえているようなこの思いを遂に吹っ切ることが出来ないで終わった。

そうだ。この棘が自分に和歌を作らせなかったのだ。そうだ。自分にはまだ和歌がある。ただこの棘が消えぬ限り和歌を作ることは出来ない。そうだ。この九州の二十五年間の栄光、苦勞、屈辱の全てをこの海に投げ捨てて、二度とくよくよと過去に悩まされることのなく、新生の出発をしよう。

奥深い和歌の道が、妻の代わりに自分を待っていると気付いた了俊は、今まで心の棘が妻の思い出さえも遠くしていたと覚った。

水島の混乱の頃に妻が亡くなったという報が入った。なにがしかの金子を送って妻の信仰していた念仏の寺に埋葬してもらったが、その墓はどう

なっているだろうか。取り交わした文は常に合戦に赴く前に全て焼却していた。

妻の思い出も和歌にあった。これからはひたすら和歌を学び、その方で名を残せるようにしたいものだ。

曇っていた了俊の顔が心なしか明るく見えた。まだ七十歳だ。あと二十年は頑張ろう。

「わしはあと二十年生きるぞ」

了俊は妻の幻に声を出して言った。そして大きく息を吸うと舷側から離れたのだった。

ちなみに了俊の没年は九十六歳であった。